

Title	『デモクラシイ』の思想
Sub Title	
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 内川, 正夫(Uchikawa, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.2 (1979. 2) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19790215-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『デモクラシイ』の思想

中 村 勝 範
内 川 正 夫

問題の所在

新人会機関誌『デモクラシイ』は大正八年三月に創刊⁽¹⁾され、同年十二月に八号をもつて終刊となつた。『デモクラシイ』の名が『東京朝日新聞』に登場したのは大正八年二月二日である。同紙によると新人会は大正八年一月三十一日に発会したとある。⁽²⁾この記事には新人会はその主張を宣伝するために雑誌『デモクラシイ』を月二回発行するとされていたが、実際は前述のごとくその年の十二月までに八冊が刊行されたのみであつた。八冊のうち第二号、第五号、第八号は発売禁止の処分をうけ、第六号は伏字多数である。『デモクラシイ』は第八号をもつて終刊となり後継誌は『先駆』と改題される。新人会は大正七年十二月七日に結成されており、それは国際的には第一次世界大戦のもたらした世界的デモクラシーの昂揚、ロシア革命等の大変動と国内的には大正デモクラシーと米騒動等を社会的背景とする産物である。⁽³⁾「人類解放」と「現代日本の合理的改造」を綱領として掲げた新人会は、吉野作造に結合する青年学生により結成されており、従つて、吉野に代表され

る大正デモクラシー運動の一翼を担うものでもあつた。⁽⁴⁾

新人会が機関誌名を『デモクラシー』ときめたことについては、⁽⁵⁾ 反逆の行為であつたとの回想がある。すなわち、この時代の日本には政治的自由がまつたく存在せず、「労働」や「社会」を口にするだけでも不穏な響きがあり、「デモクラシー」にいたつては危険思想の最大なものであつたし、吉野作造も「民主主義」というのをはばかり「民本主義」の言葉を使用しており、『デモクラシー』と機関誌を名づけることは反権力の姿勢を示す行為だつたといふのである。⁽⁶⁾ たしかに、デモクラシーの思潮は一九一七（大正六）年十一月のロシア革命以後、急進化する傾向が見られ、政府当局も危険思想家の取締りに気を配つていた。大山郁夫は大正七年の夏頃、デモクラシーと唱えることだけで内容を検討もせずこれを取締ることは妥当なことなのかと疑問を投じていた。⁽⁷⁾ その頃は「デモクラシー」という言葉は危険視されるところがあつたかもしれないが、大正七年末ともなると状況は多少かわつてくるのではないか。室伏高信は大正七年末デモクラシー運動の支柱である吉野作造をぬるま湯的であると批判し、そのポリチカル・デモクラシーを躍進せしめよと要求する。⁽⁸⁾ 『デモクラシー』が発行されて間もない頃、山川均は「デモクラシーの復興か、奴隸制の復興か」と、両者のいずれを選択するかが現代の答えるべき問題であるとの主張を展開した。⁽⁹⁾ 『改造』大正八年六月号はデモクラシーの花ざかりである。巻頭の「社論」からデモクラシーの主張が登場し、社論のいうところは官僚育ちの老人や中老が世界思潮の急変におびえ現代思潮に反抗的態度を示しており、デモクラシーやボルシェヴィズムを説く青壮年を蛇蝎視し、国家の反逆者扱いすることに對する不満が述べられている。⁽¹⁰⁾ そこには「デモクラシー」が嫌われていることが書かれているが、同時にデモクラシーは時代思潮であることをもさとしているのである。じじつ、その号にはデモクラシーが一種の流行語になつてゐることが指摘され、御釈迦様までがデモクラシーの先祖にされてしまふ状況であつた。⁽¹¹⁾ デモクラシー取締りへの大山の疑問から一年の後には民主主義を要求するとの主張が『解放』に登場する。⁽¹²⁾ こうして見てくると新人会機関誌を『デモクラシー』と命名したことが反逆の表現であ

つたという主張は言い過ぎであるように思う。「デモクラシー」とは赤松克麿が述べているように、社会改造機運を総括的に表現する合言葉であつたと見た方が正しいであらう。

『デモクラシー』創刊号の内容についてはその名称が示すように雑多だつたとも、また抽象的であつたともいわれる。あるいは当時にあつては極めて多岐豊富だつたといわれ、つぎのような解説もある。すなわち、新人会の会員にはデモクラトあり、人道主義者あり、サンヂカリストあり、アナーキストありといった有様でその思想は反資本主義的、自由主義的であるにしても、一步深く考察すれば、粗雑であり、これを実行の上に移すとなれば統一性のないものであつた。さらに新人会の思想を凝集した綱領についてもその内容がイデオロギー的なドグマというより未だ結晶するに到らないレトリックの所産だとの指摘もある。また、新人会結成後の約一年間の思想状況を林要がつぎのように語っている。すなわち、この時期はちょうど『デモクラシー』が発行されていた時期に重なっているが、新人会の会員の間には政治的デモクラシーやボルシェヴィズムの思想ばかりでなく、社会民主主義、サンヂカリズム、IWW、ギルド・ソーシヤリズム、アナーキズム、フェビアン協会イズム、国家社会主義などのイデオロギーが渦をまいていた、いろいろなイデオロギーが北国の春のように一時に咲き出た形で、一つ一つの花について、それを梅とも桜とも判断できないのが新人会員の理論水準であつた、という。林はつづけて全体の調子は社会主義的だつたのだが、マルキシズム理論をしっかりと身につけているわけでもないで、新カント派の紹介論文を読むと、こんどはその理論を簡単に社会改革や人類解放に結びつけ、齒の浮くような理想主義を振り廻すようなこともあつた、と述べている。

大逆事件により社会改革の思想を自由に論ずることが困難となり、社会改革の運動もまた至難であるという状況が続いた後に「デモクラシーのための戦い」といわれる第一次世界大戦を契機に思想の自由を享受できることになつた我国のインテリゲンチアの歡喜が『デモクラシー』の多様な思想の中に表現されている。多様であつたことから特定のイデオロギーをも

つて『デモクラシイ』の思想を統一的に把握することは困難であるが、この多様にして混沌の中にも新人会員に共通する理念の存在なくしては種々雑多な思想の持主が一個の思想団体に結合し得なかつたであろう。我々は表面的には混沌としていた新人会の思想状況の中にあつて共通の軸として底流に存在していたと思われる会員の意識がいかなるものであつたのかということをも本稿において考察してみた。

(1) 『デモクラシイ』は、四六二倍判二〇頁、定価十銭、発行兼編輯人は信定滝太郎、印刷人は岡本佐俊、印刷所は三光堂(東京市本郷区真砂町三十六番地)、発行所は新人会デモクラシイ発行所(東京市本郷区追分町十九番地)であつた。但し八号のみ三十六頁で発行兼編輯人は新明正道、定価二十銭であつた。また四号より印刷所は日東印刷株式会社となり、事務取扱所東京市外高田村三六〇〇番地を付記している。なお『デモクラシイ』の歴史的意義につきH・D・スミス氏の指摘を以下に紹介しておきたい。すなわち、新人会機関誌の発刊以前に於いても、学生雑誌は存在しており、『デモクラシイ』の創刊は学生雑誌という点では決して目新しいものではなかつた。たとえば、文学青年は同人雑誌の伝統をつくり上げていたし、同人雑誌は現代日本の文学に重要な役割を果たした。同人雑誌の伝統をふまえて、新人会も機関誌を発刊するわけであるが、新人会の機関誌は政治的な目的に学生雑誌の伝統を変えようとする学生の最も初期の努力を代表するものであつた(Henry D. Smith, *Japan's First Student Radicals*, Harvard University Press, 1972, p. 66)。

(2) 『東京朝日新聞』大正八年二月二日号には普通選挙運動の一例として新人会が紹介され、その発会式は大正八年一月三十一日に挙行されたとされている。その模様はつぎのように報道された。すなわち、「米大統領ウィルソン氏の高唱した人類解放の新運動は今や世界的の大思潮となつて我國に於ても之に協調して新機運を促進する各種の運動が開始されて来たが普通選挙要望の如き其の最も著るしき事例である。東京帝大生間に於ても此の新機運を促進する目的を以て今回法科大学生が中心となつて新人会と云うのを組織し三十一日に其の発会式を三十二番教室で挙行了た。

綱領は

一、吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新機運に協調し之が促進に努む

二、吾徒は現代日本の正当なる改造運動を行ふ

(註)

の二項より成り尚此の綱領を実現する為め全国に向つて同志の糾合をなすことを申合せ当夜の出席者二百余名は全部此の新運動に参加した」というのがそれである。なお、同記事には一創立委員の談話が掲載されている。談話は「今夕(中村 内川註、発会式当日の一月三十一日のこと)の委員会の内容に就ては未だ具体的に語る程度に進んで居りませんが、兎に角私共は運動の第一着手として来る可き紀元節をトシ普通選挙要望の為の角帽の一大示威運動を行うことにしました。当日は大学講堂か青年会館に演説会を開いて我々学生の外先輩をも集めて公開演説をなし此処で勢揃いをして午後から議會及び市中に向つて行進し道々本会の宣言及び綱領並に普通選挙に関する檄文を書いた小冊子を配布する考えです此の運動には東大許りでなく早稲田、慶應

を初め私立五大学生とも連絡を取って多数の同志を得たいと思つて今日来各大学に向つて交渉を開始して居ますが大多数は同感共鳴を表して居ますから更に三日夜を以て各大学の連合委員会を催し具体的の方法を協議する事にしました。尚本会是我々の主張を宣伝する為めに雑誌『デモクラシイ』を月二回発行致します」といふものである。

註、綱領の二において「正当なる改造運動を行う」となつてゐるが、「を行う」の部分は實際の綱領では「に従う」となつており、「正当なる」を「合理的」としてゐるものも多い。

(3) 中村勝範・酒井正文「新人会成立の背景」(『法学研究』第五十一巻第五号、昭和五十三年五月)

(4) 黎明会の民主主義運動は、学生によるこれら二団体(中村・内川註、東京帝国大学の新人会と早稲田大学の民人同盟会のこと)を両翼として行動力をそなえた(住谷悦治・山口光朔・小山仁示・浅田光輝・小山弘健編『大正デモクラシーの思想』講座・日本社会思想史2、芳賀書店、昭和四十二年一月、一三三頁)。

(5) 石堂清倫・豎山利忠編『東京帝大新人会の記録』(経済往来社、昭和五十一年六月) 四頁

(6) 『デモクラシー』ということ唱ふるものがありとする。然るに今度の戦争の結果、西洋から不健全なる民主思想が著しく我國の民間に這入つて来た。其結果若しデモクラシーという事を唱ふる者があると、其説が頗る健全なるものであつても、民間では兼てから浸み込んで居る不健全なる思想の方を直に連想する。仮に此場合、説者のデモクラシーの内容如何は問題でない。只こんな文字を舌端に上ほすことがよくないといふのである。斯ういふ処から、デモクラシーなどといふ事を説くものは如何に其説が國家を益し社會を利するものでも、均しく皆之を取締るといふのである。(中略) 不健全な危険思想を民間に流行せしめたのは、別言すれば不健全な思想の伝來に接して我國の民間が直に之に共鳴するようにしたのは一体誰れの責任か(大山郁夫「参戦以來の米國の努力と実績」△『中央公論』大正七年八月号 九十四頁)。

(7) 「吉野氏のような、天下の同情と畏敬のうちに立つてゐる学者としては、彼れ自身を弁護することよりも、彼れ自身を離らせることに力を致すべきではないか。その政治学的分析術に心を用いるよりも、徹底民主主義のうちに、彼れ自身を離らせ、更に現代を離らせることに心を用ゆべきではないか。われ等は一切の妥協的政治論を排斥する。(中略) われ等はまた用心深く自己を包んで、その言わんとするところを率直に言い、えざる政治家を必要としない。(中略) 市井の片隅において、彼れ自身に目醒めたる弱き人が、その言わんとして言いえざるところを、その人の心となつて、大胆に率直に彼れ自身を偽らずして述べるところの政治家である。そのような政治家こそ、真に時代を救いうるどころの政治家である吉野氏にしてデモクラットとしての誇りのうちに、彼れ自身の輝ける将来を見出そうとするならば、最早やアンチークなる、世に謂うところのポリチカル・デモクラシーから、その立場を躍進させなくてはならぬ。」(室伏高信「福田徳三氏と吉野作造氏」△『中央公論』大正八年新年号 一二三―四頁)。

(8) 山川均は「現代のデモクラシーに安定がないとしたならば、其れは勢い政治上のデモクラシーを社会生活の上に拡大することであるが、さもなくば、現代のデモクラシーを一層縮小することではなければならぬ」とし、「デモクラシーの復興か、奴隸制の復興か」の選択を現代が答えるべき問題としてゐる(山川均「デモクラシーの経済的基礎」△『改造』大正八年五月号 七十三頁)。

(9) 「社論」(『改造』大正八年六月号) 一頁。

- (10) 「思想問題に関する議論は近時頓に盛になつて参つた。民本主義デモクラシーなる言葉は一種の流行語となつて朝野共にこれを口にせぬものはない。彼の往年時の文相尾崎氏が共和演説を以て大臣を失脚するに至つた事を追想すると、今昔の感に堪えぬ。斯くの如きは世界の大戦の影響を受けたものであるは今更にうまでもない。此の大戦の爲めに欧州の君主国が共和国に早変りしたのも少くないのみならず、民主主義の勢力は殆んど世界の隅から隅まで席捲したといえる程であるから、極東に国を建て、戦乱の中心に遠ざかり、且戦禍を受くる事も比較的に少い我が国とても、其の影響を免るゝ事の出来ぬのは当然といわねばならぬ。」(三浦周行「デモクラシーと日本国民性」△「改造」大正八年六月号 六十七頁)
- (11) 「現代語で言へば、即ち凡ての人類の上に無上の法門を開放したもので、デモクラシーの世界最初の力説者であり、人類平等の第一の絶叫者である。三千年前に吾が御釈迦様が現代で漸くデモクラシーと、外国語でなければ通ぜぬような、生温い人間共が騒ぎ廻る説を、チャンと高唱していられる」(醍醐恵端「デモクラシーの先祖御釈迦様」△「改造」大正八年六月号 一〇八頁)。
- (12) 「私は我国も更に多く民主主義でなくてはならぬと思ふ。(中略)物価問題についても、若し当路に民主的の思想あり、愛の心あらば、二年以上も前に断然たる処置を取り人民の疾苦を救ひ、又日本経済状態の変調を防いだのである。私は素人であるけれど其位のことでは度々論じました。其他万端に民主主義を要求する」(富永徳磨「精神的に観たる世界思潮の方向」△「解放」大正八年八月号 一二三―一四頁)但し、富永は民主主義が極端に陥つたものには否定的であり、ロシアの過激派については、「どうしてもあれには同情できぬ。(中略)人民の各自は自己の意志を尊重してよいけれども世界は自己のみではない」と批判している。また、民主主義が流れて凡庸主義となつたものについては、「民主政治を衆愚政治に墮さぬ様にせねばならぬ」とし、「さすれば社会は実に清新である高潔である。進歩が止まぬ」と主張したのである。
- (13) 赤松克麿「新人会の歴史的足跡」(『日本社会運動の歴史的性質』勞務行政研究所、昭和二十三年七月 二二―二頁)
- (14) 信夫清三郎「大正政治史」(勤草書房、一九六八年六月)七九七頁 信夫氏はまず新人会の綱領を評していちじるしく抽象的であつたとし、むしろ抽象的であることが当時の学生運動の特徴であつたとしている。
- (15) 菊川忠雄「学生社会運動史」(海路口書店、昭和二十二年六月)六十頁
- (16) 菊川忠雄「学生社会運動小史」(菊川忠雄追悼出版委員会、菊川忠雄「その思想と実践」)△昭和三十一年九月所収▽三三八頁)
- (17) H. D. Smith: op. cit., P. 52.
- (18) 林要「新人会のごと」(『歴史をくぐる学生たち』東大協同組合出版部、昭和二十二年 一七四頁)

新人会と新カント哲学

新人会創立者の一人である石渡春雄は資本主義と軍国主義を人類の残虐性の双生児だとしている。石渡はリープクネヒト

(Karl August Ferdinand Liebknecht <1871-1919>) が書いた『軍国主義と反軍国主義』(Militarismus und Antimilitarismus

（1907）に基いて論稿を掲げた⁽¹⁾。この論稿の中で石渡が紹介しているところを要約するとつぎのようになる。すなわち、軍国主義は劣悪なる人間によつて支えられている制度である。つまり、批判能力を持たず命令次第なんでもするような愚鈍な頭の持ち主こそが軍国主義を支えている。従つて、軍国主義にとりより高い人格などは絶対に排撃されるべきだ、しかし、近代科学が発達してくると武器の構成は複雑になつた、この武器を有効に操縦使用することが粗末な頭でできる道理がない、知力の発達した兵士程武器を能率よくあつかうわけであるが、知力の発達は人格の向上と無関係ではない、人格的にめざめた兵士にとり軍国主義はもはや憎悪の対象となる、と石渡により紹介されるリープクネヒトの訳述の矛先は、ここから資本主義に向けられる。つまり「機械の能率を高めたためには労働者の知力を向上せしめねばならない。その結果は労働者の反省自覚となり従つて資本主義は土台からして動揺し始める」のである。以上の論述において重要なことは資本主義という制度により人類が残虐になつたというのではなく、人類の残虐性が資本主義と軍国主義を成立せしめているという発想である。従つて、人格的な向上がなければ資本主義は打倒できず、軍国主義を克服できない、とするのである。新人会は創刊号において「欲する生活は唯物的ではない⁽²⁾」と経済的自由よりも人格向上にこそより高い価値を認める姿勢を披瀝したのである。人格向上を重視する新人会の姿勢は、第一次世界大戦ごろより約十年間、日本の思想界に影響を与えた新カント派に感化を受けたものである⁽³⁾。新人会の唱える人格重視の姿勢は大正期、特に新人会の結成の時期には新人会に限らず一般的な流行思想でもあつた。新カント派のいう人間の肯定・信頼、そして個性の解放は抽象的な概念ではあつたが、人々の心に響くものであつた。それ故に、思想界に限らず文壇でも白樺派などの人間肯定、つまり人道主義的な作風を旨とする作家群が登場していた⁽⁴⁾。この頃の思想家たちはドイツの新カント哲学を紹介し、自我の解放、自由主義的・個人主義的教養について論じあつたのである。前節で既述したように新人会員は新カント派の論文を読むと簡単に社会改革や人類解放に結びつける理想主義を高唱していた。『デモクラシー』を発行した頃の初期新人会員の思想は情念に傾きがちであり、具体性に欠ける

ところがあつた。

新人会員の新村ト哲学への接近は明治時代からの社会改造の高唱者である社会主義者が考えてもみないことであつた。赤松が堺利彦を訪れ、「カントに還れ！」論をはじめると、堺は自分達のときはカントの否定から始まつたのに今の人達はカントから始めるとはどうもわからない、と答えたのである。⁽⁵⁾ 同じ社会改造の意思を持ちながら、古くからの社会主義者の革新思想に対して、新人会のそれは新時代の洗礼を受けたものであつた。⁽⁶⁾ ついでにいえば新人会の新カント派への接近は『デモクラシイ』の時期のみの限られた現象ではなく『先駆』まではつきりと存在している。⁽⁷⁾ また、新村ト派のいう個人・個性の解放はその理念を忠実に守れば守るほど新人会内は思想的には百花繚乱とならざるを得なかつた。さらに個々人それぞれの思想的立場を尊重することが最高に個人・個性を解放することになるのであるから、新村ト派的な立場を抽象的にあれ踏襲すれば、あらゆる思想が新人会では存在することができた。

『デモクラシイ』誌上には多くの先駆者の伝記や思想が紹介されている。たとえば各号の冒頭にはかならず思想家の写真が掲げられたが、それはルソー (Jean Jacques Rousseau <1712-78>)、トルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoj <1828-1910>)、マルクス (Karl Heinrich Marx <1818-83>)、ツロチキン (Pyotr Alekseevich Kropotkin <1842-1921>)、リンカーン (Abraham Lincoln <1809-65>)、キメンホン (Ludwig Lazarus Zamenhof <1859-1917>)、ローザ・ルクセンブルグ (Rosa Luxemburg <1870-1919>) であつた。⁽⁸⁾ このように紹介された先駆者たちの思想が極めて多様であることは一見奇異に感じるが、個性を尊重する新人会の新カント派的立場からすれば当然受容できる範囲のものであつた。ただし、無制限に受容するというのでなく、どのような思想であれ背景に人道主義的色彩がなければならなかつた。先駆者を語る評伝の中ではすべて彼等の人道主義的生涯が讚美されたのである。たとえば、赤松克麿がマルクスを紹介する場合、マルクスの唯物史観を信奉するのではなく、凡てを捧げて人類解放の大義に殉じたマルクスの「人道的生涯」に感激する、⁽⁹⁾ とした。

個人・個性の解放を目ざす新人会員にとり、人類を権力より全的に解放しようとするアナキズムは魅力である。新人会の一部の者はアナキズムへ接近するが、ここにおいても、唯物的であるよりも唯心的な方向が求められている。たとえば、アナキズムの思想家でもバクーニン (Mikhail Aleksandrovich Bakunin (1814-76)) よりはクロポトキンに、より強い傾斜がみられることなどは、後述するように新人会が精神的なものにより高い価値を求めた姿勢をよく示している。クロポトキンの生い立ち、さらにその相互扶助論に基づく思想は、佐野学や佐々弘雄が『デモクラシイ』誌上で精力的に紹介しているが、その際、クロポトキンはその量においてはるかにバクーニンをこえるのである。バクーニンもクロポトキンも佐野が自然科学的・社会的アナキストと性格づけ、ともに現社会の即時否定を主張しているにもかかわらず、評価に差が生じているのは新人会の求めるところが人道主義にあつたからである。つまりバクーニンは新社会が出現するに当つて大事なことは人類の価値批判や倫理観ではなくむしろそれ以外の自然的帰趨であるとする。これに対して、クロポトキンは科学的な立場をとりながらも新社会の出現にとり最高最善のものはやはり人間性であると述べている。すなわち「自分が一切の人類と一つものである」という認識こそ大事であるとしたのである。佐々弘雄がクロポトキンを科学者としての態度を超越しているとしたのもクロポトキンは人間性を重視していると理解したからであり、この点にこそ新人会の求める理想像が存在したのである。⁽¹²⁾

(1) 隅田春雄「リープクネヒトの軍国主義観」(『デモクラシイ』創刊号、大正八年三月)及び「リープクネヒトの軍国主義観」(第一号、大正八年四月、第二号は発禁となり第三号に掲載される)なお、隅田春雄は石渡春雄のペンネームである。石渡にはこの論稿を展開する中で、「凡て此等の事例は原著者(中村・内川註、リープクネヒトのこと)がドイツ、特にプロシヤの制度に付き論ぜるものなることに留意せられよ」と注意書をつけ加えている。当局に対する配慮を示すものと思われる。

(2) 「主張ネオ・ヒューマニズム」(『デモクラシイ』創刊号)

(3) 新カント派の影響を強く受けた左右田喜一郎は「黎明会同人」として新人会に影響力を持った。桑原武夫編『日本の名著―近代思想―』(中央公論社昭和三十七年十一月)によれば、「左右田は、吉野や福田らとおなじく官僚軍閥の独裁を排除すると同時に、プロレタリア独裁をも排除する立場をとつ

た。これこそ、藩閥独裁に反対して普通選挙と政党政治の実現をめざした大正デモクラシー運動の主流をなす思想的立場にはかならなかった。かれはこのような立場を新カント派的な価値哲学によつて基礎づけようとしたのである。(一四六頁)そして『文化主義はあらゆる人格が文化価値実現の過程において、それぞれ特殊の固有の意義を保持するを得、その意義においていづれかの文化所産の創造に参与する事実を通じて、各個人々格の絶対的自由の主張を実現し得ることを求むるものである。この意義において文化主義は人格主義である』ということになる。こうした文化主義ないし人格主義こそ、大正デモクラシーの哲学的表現にはかならなかった。(一四六―七頁)のである。

(4) 大河内一男、松尾洋『日本労働組合物語―大正―』(筑摩書房 昭和四十年六月 四頁)なお、武者小路実篤以下の「白樺派」の動きについては、前掲『大正デモクラシーの思想』の第四章「大正期の人道主義思想」第一節「人道主義思潮の意義」、第二節「武者小路実篤と有島武郎」に詳しい。

(5) 前掲林要「新入会のごろ」一七四頁。

(6) 新人会は新カント派を含めて当時の流行思想の産物であつた。たとへば宮崎龍介は「世界的建設、社会的改造に参加せんとする吾人を目して『大勢迎合者』なりとし、浅薄なる批評を加うる識者や学者あることを悲しむ」(『政治より生活へ』「デモクラシー」第二号)と主張しているが、世界的建設、社会的改造ということば自体がすでに当時の流行思想であつた。すなわち、「日本ばかりが渾沌としていたのではなかつた。あらゆる民族が新しい世界の夜明けを待ちのぞんでいた。リコンストラクションは世界の復活する唯一の途であつた。そして、改造は世界の合言葉となつた」(横山春一編『改造目次総覧』新約書房、昭和四十二年十二月、五頁)のであり、この合言葉をうけて、大正八年には『デモクラシー』のみでなく、評論雑誌、総合雑誌が相前後して刊行された。雑誌名は『社会問題研究』(一月刊)、『我等』(二月刊)、『改造』(四月刊)、『社会主義研究』(四月刊)、『解放』(六月刊)であつた。

(7) 赤松克麿は『先駆』創刊号(大正九年二月)の「カントと我等」で「不朽の哲人カントは、依然として我等の思想の故郷である」としている。また『先駆』第二号(大正九年三月)の「新入会記事」には「吾々は今、一方に左右田博士の下に新カント派理想主義の哲学を研究中」とある。

(8) 各号の「人物評伝」はつぎのようになされた。すなわち、血潮子「赤裸のルソー」(『デモクラシー』創刊号)、なお血潮子は宮崎龍介のペンネームである。観風子「解放の父トルストイ」(同第二号)、入笠禁となり第三号に掲載)、なお観風子は赤松克麿のペンネームである。隈田春雄「カルル・マルクス」(同第四号、大正八年六月)、既述のごとく隈田春雄は石渡春雄のペンネームである。佐々弘雄「クロポトキン」(同第五号、同七月)、平貞蔵「奴隷解放の巨人リンコルン」(同第六号、同九月)、山崎一雄「ザメホフ博士とエスベラント」(同第七号、同十月)、友成與三吉「ローザルクセンブルグに就て」(同第八号、同十二月)、なお友成與三吉は山崎一雄のペンネームである。

(9) 赤松克麿「宣伝解放運動の真精神」(『デモクラシー』第五号)

(10) 佐野学「クロポトキンの社会思想(一)」(『デモクラシー』第五号)並びに前掲佐々の「クロポトキン」がある。さらに『デモクラシー』第二号には無題として「クロポトキン」、無署名でクロポトキンの「ホツテントットの生活」が掲載されている。また、佐々弘雄は第二号「先駆者を憶ふ」の中でクロポトキンにもふれている。佐々は「クロポトキンの相互扶助の本能、トルストイの所謂人類愛の上、ロマン・ロランの新しい道德の上に、人類は、目晴ましくも其の創造の斧を振ひつゝ、やがて永劫の人類の共存と、正と善との文化生活の上に、人則神のバビロンの塔を打ち立ちつるであらう」と述べて、「新

時代の文化は人類の唯物的改革の上のみに建てらるゝものではないことを強調している。

(11) 片島新「無資産階級解放の道」(『デモクラシイ』第二号)、なお、片島新は佐野学のペンネームである。

(12) 前掲佐々「クロボトキン」

新人会と労働運動

新人会は、現代の日本が人格的解放をめざすにはあまりにも不適當であると認識し、状況打破のために合理的改造を進めることを目的とした。合理的改造は現代日本において著しく拘束されている労働者との連帯をもつてより強固なものになるとされた。新人会は最初普通選挙運動を対外活動の第一歩として実行した。しかし、やがて普通選挙運動よりは労働運動へより強く傾斜することになった⁽¹⁾。それ故に、新人会にあつては、ウ・ナロード(人民の中へ)の動きは普通選挙活動よりも労働運動への積極参加の形で実現されていくのである。ロシアに源流を発するウ・ナロードの生き方を新人会が労働運動に見出した理由は、労働者が資本主義社会において権力から抑圧され、資本家の搾取に苦しむ者であるから、これの解放のために労働者の中へ入っていくことこそ現代のウ・ナロードであると考へたのである。つまり、新人会員は現代社会を「戦場は死屍に栄え、監獄は貧窮者の犯罪に栄え、邸宅は貪婪飽くなき資本家の富に栄え、貧民窟は無智と疾病と悪臭とに満ちている。地は権力と奴隷と反抗と饑飢と不安に蔽われて争奪と殺戮の海にある」と認識し、社会にあつて労働者階級は奴隷のごとき生活に⁽²⁾あ⁽³⁾いていと考へた。奴隷の境遇にあえぐ労働者を解放するためには知識人たる青年学生はまず労働者の中へとびこむことが急務であると考へた。青年学生はツルゲエネフ(Ivan Sergeevich Turgenev <1818-83>)の『処女地』(NOV <1877>)に深い感銘を受け「ヴ・ナロード」を叫ぶことに生き甲斐を感じていた。『デモクラシイ』創刊号には『処女地』の中の抜萃が「ネツダーノフ」として掲載されている。赤松克麿は、ツルゲエネフの小説が新人会員に与えた影響について、ツルゲエネフ等の小説に現われてくる「人民の中へ」の革命運動が、赤松らを感傷的に刺戟したことは甚大なものであつた、と述べ⁽⁴⁾

ている。

ロシアにあつて「ヴ・ナロード」は農民の中へ飛び込むことを意味していたが、新人会にあつては労働者の中へ飛び込むことであつた。石渡は大正七年十月の時点で「僕はツルゲーネフのものを読んでゐる」といいつつも、ロシアの学生のヴ・ナロードの運動に批判的見解を示している。つまり、ロシアの運動が失敗した原因は熱情一点張りで一定のイズムを持たなかつた点にあると石渡は考えた。『処女地』のネッダーノフは農民の間に宣伝に出掛けたまではよかつたが、農民にいい加減にこづき廻されているのであり、その揚句は幻滅を感じて自殺するが、このような状況を石渡は「トルストイの人道主義が街頭でさらしものにせられた恰好ぢやなかつたかと思う」とし、「僕は一つのイズムを把握しなければならぬと思う。僕等の団体はどのイズムによるべきかね」と新人会での「ヴ・ナロード」運動の方向性を模索したのである。新しいイズムは『デモクラシイ』創刊号では「ネオ・ヒューマニズム」として主張された。当時の大学卒業生の理想は官界に入るか、半官半民の日本銀行、満鉄、あるいは八幡製鉄所などへ就職することであつたがネオ・ヒューマニズムに心酔する新人会の学生は、労働組合運動に身を投じ、労働者階級に彼等の考えをしつかりと植えつけ、そのことにより日本の改革を實行しなければならぬと考へていた。⁽⁸⁾

新人会は、大正八年二月二十四日に新人会亀戸分会を発会させた。労働者のサークルであつた。宮崎龍介はかれらが亀戸分会における労働者との連帯にいかにか歓喜雀躍したかをつぎのように伝へている。すなわち、「二月下旬の或る日曜日に小松川のN工場に働らいているW君から突然通知が来て廿四日の夜亀戸分会発会の集りをするから大学から大勢で出掛けよとの注文があつた。嬉しい、大願成就!!と云う感じが本郷連の脳にヒンと響いて、千万人の味方を得た思いにホロリとなつた者もあつた。工場の兄弟が新人会劈頭の分身として生れ出て呉れた」という報告文がそれである。新人会亀戸分会はやがて労働組合結成の方向に進み、同年五月六日には全国セルロイド職工組合の発会式が挙げられた。⁽¹⁰⁾ この組合は渡辺政之輔たちが

働く永峰セルロイド工場の職工を中心としており、また別名、新人セルロイド工組合ともいわれたのである。この組合の亀戸支部では七月二十九日に永峰セルロイド会社の職工三百五十余名が賃銀五割アップ、請負仕事三割値上げを要求してサボタージュを始め、三十日よりストライキにはいつた。八月一日に会社が賃銀平均三割、臨時手当約二倍半増額を発表して、労働者側の勝利のうちに争議は解決した。⁽¹¹⁾ このストライキの間に、新人会本部はまさに上を下への騒動で会員は亀戸の一角のストライキに連日連夜昂奮し、決死の覚悟をもつて亀戸に押しかけた。勝利の報は当然ながら『デモクラシイ』に報告された。そこには要求も正当であり手段も秩序正しく資本家側にも頭のある人があつたので要求全部貫徹圓滿解決、⁽¹²⁾と書かれていた。

『デモクラシイ』の創刊に先立つ約四年前から新人会員となる野坂参三が友愛会に関係し、やがて棚橋小虎(大正七年九月二十八日入会)⁽¹³⁾、麻生久(大正八年六月入会)⁽¹⁴⁾、山名義鶴(大正十三年一月正式に総同盟政治部員となる)⁽¹⁵⁾らの新人会員が友愛会に入会する。棚橋、麻生らは、労資協調主義路線を行く友愛会を戦闘主義に転換させることによつて、友愛会を改革しようと考えていた。具体的には大正八年八月三十一日に開かれた友愛会第七周年大会で会名が「大日本労働総同盟友愛会」と改称されてその後の友愛会の体質転換の先がけとなつた。さらにこの時採択された大会宣言の内容は『デモクラシイ』の主張する人格重視の反資本主義姿勢とまつたく同じであつた。つまり、資本主義の害毒が攻撃され、賃銀奴隷の解放が叫ばれ、個性の発達と社会の人格化のために、生産者が完全に教養を受け得る社会組織と生活の安定と自己の境遇に対する支配権を要求することが大会宣言にうたわれた。人格向上により資本主義を打倒する姿勢はまさに前節で指摘したように新人会の姿勢と同じである。大会宣言は賀川豊彦が起草したものであつた。⁽¹⁷⁾ この頃、賀川は新人会本部を訪問したり、新人会主催の演説会講師をひき受けていた。新人会は新人会出身者を通し、また賀川を通し、友愛会に少なからぬ影響力を及ぼしていた。赤松は「友愛会の急進化についてはそのころ友愛会本部に入つた棚橋小虎、麻生久等の思想的影響を見逃すことは出来

ない。(中略)問題となつたのは友愛会の改革であつた。従来の協調主義方針を戦闘主義に転換しようとする議が進められ、その使命をもつて、麻生、棚橋、しばらくたつて、赤松、三輪などが友愛会に入つたのであつた⁽¹⁸⁾と説明している。なお、山崎一雄が友愛会大会を傍聴し、友愛会が無産階級解放のために徹底的に戦う組織となつたことでこの大会がわが国労働運動の歴史上記念すべきものとなつたと『デモクラシー』に記した⁽¹⁹⁾。

人格向上を労働運動の基本理念とする友愛会の大会宣言が新人会をはじめとするインテリゲンチヤの思想を反映したものであつたことは『デモクラシー』の論稿を分析することによりさらにはつきりとする。たとえば、高山義三は、労働運動の目的を無産者の所得の増加または労働時間の短縮それ自体にあるのではなく運動を通じて労働者の精神生活の向上を計り以つて文明に寄与させることに外ならない⁽²⁰⁾、と性格づけている。高山の主張は労働運動成功の賜物である値上げされた賃銀や獲得された余暇の使われ方を問題にしていた。つまり、労働運動の賜物を、もし労働者が一夜の酒食や賭博の料にしたり、遊蕩惰眠に費やすのであれば、労働運動といえない、遊蕩惰眠に労働運動の賜物を費すようなことが労働運動の目的だとするならば、刑に問われるがごとき危険をおかしてまで全力を尽す価値を労働運動はもたない、すべからず労働運動の目的は個性の発達と社会の人格化を促進することである、と知識人高山は定義したのである。『デモクラシー』で労働者出身の松岡駒吉に「労働者を苦しめて来た人間」として知識階級を批判させた⁽²¹⁾新人会の姿勢にはインテリの自己反省があらわれている。しかし、知識階級は「労働者を苦しめて来た人間」であるとして反省することがただちに彼等がいだく人格向上を骨子とする労働運動の基本理念の譲歩を意味したわけではなかつた。従つて、労働者をもつ運動への具体的な期待感と知識階級の抽象的な期待感とはズレを生じがちであつた。労働運動の成功のためには是非とも両者の連帯は必要であるにもかかわらず、連帯の確立はかならずしも成功していないとの焦りが『デモクラシー』に表出されている。吉田松陰以下の書生が奇兵隊と結合して明治維新が成功したように、インテリも労働者と結合してはじめて労働運動の維新ができるのに、「近頃浅薄な自殺的

誤解がないわけでもないから、一応両者の徹底した反省を求むる次第である」との認識は両者の連帯について『デモクラシ』が与えた重要な警告であつた。⁽²²⁾

(1) 松尾尊兌『第一次大戦後の普選運動——一九一八—一九二〇年——』(井上清編『大正期の政治と社会』△岩波書店、一九六九年三月√所収 一七三頁)、及び三谷太一郎『大正デモクラシー論』(中央公論社、昭和四十九年六月 三十一—二頁)。

(2) 前掲『主張ネオ・ヒューマニズム』

(3) 麻生久『我等労働者の鉄鎖』(『デモクラシ』第二号)

(4) 赤松克麿『新人会の歴史的足跡—創立十年にして倒れた彼の社会運動史的業績』(『改造』昭和三年六月号)

(5)、(6)、(7)、前掲菊川『学生社会運動史』三十四頁

(8) 前掲『東京帝大新人会の記録』三十一—三十一頁

(9) 血潮子『亀戸の夜雨』(『デモクラシ』第二号)。宮崎らの新人会員は麻生久、棚橋小虎、佐野学、岡上守道、山名義鶴、野坂参三などの先輩たちにならつて、どこかの労働者街にアジトを置きたいと考えていた。渡辺政之輔をはじめとする亀戸の労働者と知り合いになつたことはまさに好都合であり、『デモクラシ』創刊号は永峰セルロイド工場内の『篤友』同人をはじめ多くの工具たちに無料配布された。なお『篤友』は渡辺政之輔、菴沢義夫、出井紀作を中心として発刊されていた(恒川信之『日本共産党と渡辺政之輔』△三書房、一九七一年一月√十五頁、三十三頁、十六頁)。

(10) 『日本労働年鑑』によれば、「五月中旬東京帝国大学などの小壮家の会合である新人会の連中が後援の下に東京本所永峰セルロイド工場の職工が作つて居た古い歴史ある小さい職工組合が拡張され新人セルロイド職工組合なるものが組織された。同会の幹部は菴沢義夫、渡辺政之輔氏等であつたが其後の会発展支部の増設等につき会員中幹部に反感を持つ者を生じ菴沢氏等は辞職した。其為会員も大に減少し且下は永峰工場の職工丈に限られている様である。」

同組合の規約、目的及事業の主たるものは大凡左の如くである。^(註)

二、本組合ハセルロイド職工ヲ以テ組織ス

三、本組合ハ人類共済ノ精神ニ基キ組合員ノ生活ノ安固、人格ノ向上ヲ計ルヲ以テ其ノ目的トス

四、本組合ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ適當ト認ムル各種ノ實際的施設ヲナス

(一) 共済事業 吾々カ若モ現在ノ様ナ苦シイ生活ニ於テ一朝病氣トカ災害トカニ出逢タ場合ハ実ニ困難シナケレハナラム。

(二) 購買組合 諸物価ハ益々高クナル從ツテ吾々労働者ノ生活ハ益々不安ニ陥ル此際少シテモ安イ物ヲ得ナケレハナラム。

(三) 職業紹介 吾々ノ生活ハ工場主ニ支配セラレテ居ル其死活ハ一ニ工場主ノ掌中ニアル、一朝不幸ニシテ解雇セラレタ場合ハ其日ヨリ路頭ニ迷ハナケレハナラム。

(四) 自由法律相談所 吾々ハ法律ノ知識カ無ク為メニ常ニ当然要求スヘキモノヲ要求セスニ自ラ不合理ヲ忍ムテ居ナケレハナラナカッタ
 (五) 争議調停 工場主ト吾々ト利害ノ一致セサル場合何ウシテモ争ハ免レヌ然シ吾々ノ力ハ微弱デアツタ為メニ常ニ不利ヲ蒙テ来タ
 (六) 倶楽部 吾々ハ過勞ノ為メニ精力ヲ消耗スル故ニ心身ノ慰勞ヲ求メナケレハナラナイト共ニ相互ノ親睦ヲ計ラネハナラム
 右の様な諸問題は現在の労働者間に於て随分重大な事柄となつて来た。吾々は此等の諸問題を解決する為に奮起しなければならぬ。然し従来とても多の人が手を付けたそして失敗の苦い経験を持つた。それは何故失敗したのであるか。一言にして尽せば個々別々な運動を続けたためである欧米諸国に於ては組合を設立して其の目的を達することが出来た。吾々日本の労働者も此の儘では外国に対しても恥しい。組合の必要は時代と共に益々必要になつて来た。

本組合は右に挙げた諸問題を解決し労働者の地位を高むるために此の際諸君の加入を切に希望して止まない吾々は諸君と共に協同して諸君の問題を解決せんとするに躊躇しない。諸君も心を開いて組合に加入せられんことを乞う(大原社会問題研究所編纂『日本労働年鑑』大正八年大正九年五月三九一―二頁)

註 規約は二から掲載されている。

(11) 永峰セルロイド工場では新人セルロイド工組合成立直後の大正八年六月二日最初の労働争議が発生していた。「東京浅草橋威前永峰セルロイド商會では其所有の本所押上町工場及北豊島郡上尾久工場の職工三百八十余名に対し、物価騰貴につき事業縮小を理由として賃銀値下の交渉をなした。恰も此時新人セルロイド職工組合成立せる如にして永峰セルロイド商會の職工の大部分は其會員なりしを以て同組合は大に之を憤慨し演説會を開いて示威運動をなし却つて職工側より三割値上を要求せしめ同盟罷工を為さしめた。同商會は大に狼狽し直ちに其要求を承認する旨を約して漸く解決した。」(前掲『日本労働年鑑』二十一頁)また七月の労働争議は「七月二十九日、正午より東京亀戸押上の永峰セルロイド会社職工三百三十余名が(中略)同盟的意業を初めた、三十日に至つて交渉委員を選んで会社側と折衝を重ね三十日以降問題解決迄不就業を罷議して動静視察委員、伝令、巡視係演説係等部署を定めて活動し初めたので会社では平均三割値上、臨時手当二倍半増額を発表して一日より全部就業解決」(右同 五十七頁)されたのである。

(12) 「新人會記事」(『デモクラシー』第六号)

(13) 棚橋小虎追悼刊行會『追想棚橋小虎』(一九七四年十二月二十五日)所収の「棚橋小虎年譜」による。

(14) 野口義明『無産運動総闘士伝』(社会思想研究所、昭和六年六月) 十七頁

(15) 右同二九四頁。

(16) 麻生や棚橋にとり資本主義と妥協する勞資協調主義は受け入れることの出来ないものであり、資本主義打倒のために労働組合は戦闘的になる必要があつた。従つて、麻生や棚橋の入会後は、大正八年の大会に限らず、戦闘化傾向が強まり、大正十年の友愛會大会でも、創立当時の綱領の「吾等は共同の力により着実なる方法を以つて吾等の地位の改善を図らんことを期す」という勞資協調主義的内容が、「我等は労働者階級と資本家階級とが両立すべからざる事を確信す。我等は労働組合の實力を以つて労働者階級の完全なる解放と自由平等の新社会の建設を期す」と資本主義打倒の姿勢が明確なものに変わる、すなわち友愛會は改良主義的労働運動から蟬脱して階級闘争主義に変わるのである(前掲『無産運動総闘士伝』附「日本社会運動史」三三〇頁)。

- (17) 赤松克麿『日本社会運動史』(岩波書店、昭和二十七年一月 一六一頁)
- (18) 右同、一六一―二頁
- (19) 友成與三吉「友愛会大会傍聴記」(『デモクラシイ』第七号)、なお、與三吉は山崎一雄のペンネームである。
- (20) 高山義三「評論 労働運動の根本義」(『デモクラシイ』第八号)
- (21) 松岡胸吉「智識階級に希望す」(『デモクラシイ』第二号) なお、知識階級と労働者の問題を論じたものに平貞蔵の「有識者の従属的地位」(『デモクラシイ』第八号)がある。
- (22) 「労働者と智識階級」(『デモクラシイ』第七号)

ボルシェヴィズムの影響

新人会はヒューマニズム、リベラリズムに近い運動として発足したが、たちまち社会主義に傾斜していった。⁽¹⁾ 林要は社会主義の中にこそ、公平を求める人道的熱情が燃えていると指摘した。⁽²⁾ 波多野鼎は現代戦争に関する社会主義者の見解を紹介しながら社会主義者こそ真の平和主義者であると是認することで社会主義への好意的姿勢を示した。⁽³⁾ 波多野は社会主義者は現代戦争を帝国主義、軍国主義、似而非愛国主義に基因するものにとらえたが、社会主義者のインターナショナルな立場は国民的感情とはかならずしも一致しなかつたと紹介する。たしかに第二インターナショナルはナショナルな枠を抜けきれずに第一次世界大戦に対する反戦的立場を維持し得ないまま崩壊していった。しかし、波多野はロシア革命の成功が社会主義者の主張が空論でなかつたことを証明したように平和運動についても社会主義者の主張は空論ではないとする。平和運動は社会主義者のみの行いうるものとする波多野もまた社会主義を志向していた。新人会員の社会主義傾斜は新人会のみについた特殊な現象ではなく当時の一般的な傾向でもあつた。『デモクラシイ』とはほぼ同時期に創刊された『改造』を救つたのもこの社会的な風潮であつた。『改造』は第四号(大正八年六月)にして創刊号以来の不振をはねかえし、ようやく軌道に乗つたが、その契機になつたものは「労働問題社会主義批判号」であつた。⁽⁴⁾ この号は店頭からまたたくまになくなつたという

が社会主義批判号がかくも大好調の売れ行きであつたということはそれに先立ち社会主義が読書界においてもてはやされていたことをしめすものである。『改造』第四号には福田徳三と賀川豊彦が登場している。福田は吉野作造とともに黎明会の理論的主柱であり、新人会とも密接であり、しかも新人会員が編集に加わる『解放』の顧問でもあつた。この福田が『改造』第四号の労働問題批判特集の冒頭執筆者として「経済生活改善途上の一大福音」を掲げ、社会主義批判の特集では、福田と同様に新人会との関係が深い賀川豊彦がやはり冒頭の「唯心的経済史観の意義」を執筆したのである。『改造』第四号は世人の社会主義への関心の高まりにそつて編集し雑誌の危機を救つた。

社会主義への接近を社会主義を支持すると明確に唱えていることのみで判断せずに、階級闘争などの社会主義的用語の使用にまで拡大して考えると、『デモクラシー』の論稿の大半は社会主義に傾斜していたということが可能である。しかし、社会主義用語を使用することがただちに社会主義理論の理解につながつていたとは判断できない。心情的に人道主義的側面から社会主義に好意を抱きつつも、社会主義の本質を十分に理解していない者も新人会に存在した。たとえば、新人会が機関誌に訳述した社会主義の文献についても、訳書の選択はかならずしもプログラムのにはなされておらず、偶然の要素が強くあつたのであり、従つて紹介された西洋のイデオログにしても本国の評価に比し、会員の手によりたまたま翻訳されたために日本に於いての評価の方がより高くなる場合もあつた。⁽⁵⁾新人会の社会主義思想導入の動きは機関誌における関係誌面の量の多さでその熱意を理解することができるが、社会主義に対する理解度を見ると中には、水準に達しないものもあつた。この意味からも新人会における社会主義への接近はいまだ漠たるものにとどまつていたのである。門田武雄はマルクスが否定した宗教的情熱を基盤にして社会主義との融合を求めているが、⁽⁶⁾この発想などもマルクス主義を正しく理解した結果生まされたものとは考えられない。門田はマルクスは労働者解放の必要条件として世界労働者の結束を絶叫したが、キリストはそれよりも崇高な形で人類解放の過程として世界同胞の博愛を説いたという。つまり、門田によればマルクスは経済的にキリ

ストは精神的に近代社会の欠陥除去に貢献するのであり、両者が融合してはじめて人類本然の生活に復帰できるといふのである。しかし、門田が「世界救極(マテ)の力は外交に非ず国際連盟に非ず唯神に向つて正義の支配を祈る殉教者の心のみ」と説く姿勢には、マルクスではなくキリストにより世界平和が確立されるという主張はつきりと出ている。新人会は帝大基督教青年会のメンバーが加入していたことからキリスト教の濃厚な社会主義の立場が会内に一部存在したことは当然といえる。門田もまた帝大基督教青年会のメンバーの一人であつた。明確に社会主義を志向する林から、漠然と社会主義を志向する門田らに伺えるように、新人会員のめざす社会主義の内容は雑多であつた。マルクスやレーニンを讚美する一方オッペンハイマー(8)、シュルツェ・ゲヴァーニッツ、エルヴェ(9)、ラッセル(10)、ベルンシュタイン(11)、ブルードン(12)と、関心が分散しており、初期会員の社会主義像は模索の段階にあつたことが知られるとの指摘(13)の通りであり、内容面において雑多であつたことは否定できな(7)い。

新人会員がおおむね漠然とした社会主義を志向していた中においてマルクス主義をかなり明確に志向していた者は佐野学である。佐野はシュルツェ・ゲヴァーニッツ(Schulze Gavernitz?)の『マルクスかカントか』(Marx oder Kant? <1909>)を『デモクラシー』で紹介している。ゲヴァーニッツは新カント派の学者であり、マルクスに魅力を感じながらも、最終的にはカントをとるのである。佐野はゲヴァーニッツが一九〇八年にフライブルヒ大学で行つた講演を翻訳したが、その紹介の冒頭に佐野自身が「本文を読んでマルクス主義になり度い人はなるがいい」とことわり書きを附加している。意味深長な文である。この文からはマルクス主義を否定するニュアンスは感じられない。肯定ではなくとも否定する強い姿勢は伺えない。また、佐野はウェルナー・ゾンバルト(15) (Werner Sombart <1863-1941>) の著作を利用して「無資産階級解放の道」を執筆する(16)。佐野はその中でレーニンをしてマルクスの大いなる復興と位置づけている。佐野は「私は社会主義者ではない」といしながらもその説き明かすところはプロ・ボルシェヴィズム的である。すなわち、社会主義の實際運動は甚だしく旺盛

であつて文明國中、社会党を有せざるものは無い、その典型はドイツであつて社会民主党が如何に規律正しき運動をなせるかは、人の知るところである、しかし、前世紀末の「カントルに返れ」の風潮によつて發生した所謂修正派社会主義は實際運動としては社会主義の墮落である、と新カント派的修正派社会主義を否定し、議會主義と妥協するような社会主義などは無資産階級が一蹴してうべき性格のものであるという。佐野はつづけて、「反之マルクスのコムニスト的精神を純粹に忠実に実行しつゝあるものは露国のボルシェヴィキである。私は最近に於てマルクスは復活をなしたと思う」とレーニンの指導によるボルシェヴィキを評した。ここに於いても佐野はボルシェヴィズムへ傾斜していることを示している。

佐野とともに満鉄調査部に勤務し、新人会に於ける研究面の中心でもあつた岡上守道はアナキズムの立場から、レーニンを評する⁽¹⁷⁾。岡上はレーニンの『國家と革命』(*Gosudarstvo i revoliutsiya* (1918))を参照にしてレーニンにおけるアナキズムの要素をつぎのように解説する。まず社会主義の中に理想主義が回帰しつゝあるのではないかと予測するが、その根拠は以下の文に示されている。すなわち、岡上は唯物論の結果たる十九世紀の社会主義は断然、理想論たるアナキズムと分離したが近代に至り新理想主義の曙光の閃きと共に此の両者は或る点に於いて互に握手せんとして居るのではないかと社会主義の中に理想主義が回帰しつゝあることを指摘し、さらに「十九世紀の後半にはマルクスとバクニンは断然として袂を分つたのに反し今世紀のレーニンは絶対的にマルクシズムを奉戴すると称し乍ら、其の革命論に於てはエンゲルスの *Staats absterbens theorie* に満足せずして一種のアナキズムを主張して居るのである」としレーニン指導下のボルシェヴィキ革命に唯物的ではない理想主義的側面があるとしている。この点において佐野と岡上はレーニンを讚美しながらも異つた次元からの評価を与えている。佐野は「無資産階級解放の方法としてアナキズムに反対する」といつているのである。何故ならば、「社会組織は猶中央集権的であることを必要とする」と考える佐野の立場からすれば、権力支配を否定するアナキズムには統治原理としての性格を見出し得ず反対しているのである。やがてボルシェヴィキはソビエト制度に

よる最高度に中央集権的な政治機構を完成させるのであるから、この意味に於いて佐野は正しくボルシェヴィキ革命を理解していたといえる。一方、岡上のレーニン讚美は佐野のいう中央集権とは全く逆の個人の解放の立場よりなされたわけであるが、そのボルシェヴィズム理解は希望的観測にとどまつている。岡上と佐野は麻生と三人で『過激派』⁽¹⁸⁾を出版し、ボルシェヴィキの紹介を行なつた。しかし、『デモクラシイ』の論稿では両者は極めて対称的なレーニン観もしくはボルシェヴィズム観をもつていた。

『デモクラシイ』誌上にはしばしば、ドイツ革命とロシア革命のことがふれられている。ドイツ革命は『デモクラシイ』誌上ではリープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの活動と死に関連して描かれていることが多い。両者の死は我国でも大きく報道され、『東京朝日新聞』には全身写真が掲載されるほどの扱いであつた。⁽¹⁹⁾しかし、ドイツでは革命勢力が敗退しているだけに『デモクラシイ』の論調もドイツの革命勢力については否定的である。従つてドイツ社会民主党に対する評価も限定的である。他方、ロシア革命に対しては、それが成功しているだけに好意的な論稿がある。ロシア革命の状況は山川均が大正十年に出版した『レーニンとトロツキー』により初めてわかつたという説がある。⁽²⁰⁾それ故に大正八年の段階ではロシア革命の実態は依然として不明の部分が多かつた。『デモクラシイ』誌上でも過激派の近情、露国の状態は殆んど五里霧中であり、暗中模索とされたが、⁽²¹⁾佐野のロシア革命の本質を見極める力はすぐれていた。たとえば、帝制ロシア時代からの婦人革命家プレスカウスカヤ女史の紹介においてボルシェヴィキの本質を指摘している。⁽²²⁾佐野はこの論稿においてもレーニンを最も純粹な社会主義者であると強調している。佐野によればレーニンの革命はロシア民衆といつた狭い意味の民衆を救うためのものではなくもつと広く国際的社会的革命だと意義づけられており、価値あるレーニンの革命では「労働者の専制」すら是認されるのである。従つて、佐野は徹底を欠く妥協的な革命家については否定的である。プレスカウスカヤはまさに佐野にとつては否定されるべきタイプの革命家だったのである。彼女の信念は唯物的ではなく、キリスト教精神に裏づけられ、

「神を父とし世界を家とし人類を同胞とする」唯心的なものであつた。また、自由と平等を求めるなら、多少の意見の違いは「小さき差違」として許容しあうべきというものであり、その意味に於いて極めて譲歩的な革命観であつた。プレスカウスカヤがたとえ獄中三十数年の闘士ではあつても、妥協的な彼女の革命観によつては到底資本主義と軍国主義を抹殺できないのである。それ故に、佐野はレーニンが彼女の革命観を革命遂行上の障害物ととらえ、彼女を追放したことは当然のことであるとしている。このように佐野は、多くの人びとにはロシア革命の状況が未だはつきりしない時期にあつてかなり適確に革命の本質を把握しており、ボルシェヴィズムが専制をとまぬ革命観たることの理解などは最も確なものであつた。新人会の社会主義志向は複雑であり、確かに『デモクラシー』を見た限りでも様々な主張がなされていたが、全般に、ロシア革命への好意的な姿勢は強いものがあつた。注意すべきは佐野においては新人会がめざした人格解放とまさに正反對の専制的性格をもつロシア革命についても是認が与えられた点である。また、「自由と強制⁽²³⁾」ではその専制が前衛思想と結びつけられて是認されている。つまり、「レーニン・トロツキーが甚しき専制を行つている如く見ゆるのはあのような突變的進化をやつた後の一時の変態で(二十二字伏字)。旧習になじんでいる民衆を一刻も早く理想の生活に引上る為には、その理想の状態をはつきり見極めている指導者が一寸見には専制と見える位に、強制力を以つて万事を整頓する必要がある」とボルシェヴィキ政権下の専制を肯定するのである。

- (1) 前掲『東京帝大新人会の記録』五頁。
- (2) 林要「理想なき社会」(『デモクラシー』第六号)。
- (3) 波多野謙「社会主義と平和運動」(『デモクラシー』第五号)、なお、波多野謙は波多野鼎のペンネームである。
- (4) 前掲『改造目次総覧』八〜九頁。
- (5) H. D. Smith, op. cit., P. 72.
- (6) 門田武雄「世界救拯と宗教運動」(『デモクラシー』第七号)
- (7) レーニン(Vladimir Il'ich Lenin <1870-1924>)については『デモクラシー』第八号に嘉治隆一が「瑞西労働者への訣別の手紙」を記述し、ま

た無署名の「レーニンに就て」も掲載された。

- (8) 「新人会叢書」の第一篇はオットー・ハイマン (Franz Oppenheimer <1864-1943>) 著の『国家論』(Der Staat <1907>) を岡上守道が翻訳する事になつてゐた。(編輯使り) <『デモクラシー』第八号>
- (9) エルヴェ (Gustave Hervé <1871-1944>) に對しては『デモクラシー』第四号に村上堯が「仏国大革命後の階級対立—仏国法廷に於ける陳述の一節」、また第六号に同じく村上による「三個の食卓」が訳述された。
- (10) ラッセル (Bertrand Russell <1872-1970>) に對しては『デモクラシー』第三号に波多野謙が「我等は何を為すべきか」を訳述した。
- (11) ベルンシュタイン (Eduard Bernstein <1850-1932>) の修正社会主義の立場が佐野学の「マルクスかカントか(一)」、「デモクラシー」第四号) の冒頭に紹介されているが、佐野は修正派の實際運動は社会主義の墮落と思ふといつても、その理論は深みに富むとし、ベルンシュタインらの修正派の研究をやがするつもりであると述べた。
- (12) プルーダン (Pierre Joseph Proudhon <1809-65>) に對しては佐野が前掲「無資産階級解放の道(二)」でその宗教的理想主義的アナキストの立場を紹介している。
- (13) 前掲『東京帝大新人会の記録』六頁。
- (14) 片島新「マルクスかカントか(一)」、「デモクラシー」第四号)、「マルクスかカントか(二)」(同 第五号)、「マルクスかカントか(三)」(同 第六号)、「マルクスかカントか」は「新人会叢書」の第二編となつた。また左右田喜一郎監修社会問題研究叢書第二篇として発刊された横浜社会問題研究所編『新カント派の社会主義観』(岩波書店、大正十四年二月)にも紹介された。
- (15) ウエルナー・ゾンバルトはプレスラウ大学に一八九〇年より十六年間在職したが、マルクス主義を理解する唯一の大学教授として盛名をはせた。この時代にゾンバルトは『社会主義および社会運動』(Sozialismus und soziale Bewegung <1896>) を著したが、この著作は『共産党宣言』の重要性を強調し社会主義の普及に貢献するところが大きかつた(平凡社『世界大百科事典』)。「デモクラシー」創刊号に野坂鉄はゾンバルトがマルキストである時代に書いたこの著作を利用して「社会主義及社会運動(一)」を書き、「社会主義及社会運動(二)」は第三号に掲載された。なお、野坂鉄は野坂参三のペンネームである。ゾンバルトは一九〇六年にベルリン商科大学へ、さらに一九一七年ベルリン大学へと転出する。しかし、思想的には左に右傾化し「社会主義および社会運動」の改訂版『プロレタリア社会主義』(Der Proletarische Sozialismus <1924>) では階級的立場に立つ社会主義に對してきわめて批判的な態度をとり、民族に基礎をおく社会主義の成立の可能性を示した。そして『ドイツ社会主義』(Deutscher Sozialismus <1934>) でこの主張を積極的に展開した(右同)。
- (16) 月島新「無資産階級解放の道(一)」、「デモクラシー」創刊号)、片島新「無資産階級解放の道(二)」(同 第二号) なお、月島新は片島新とともに佐野学のペンネームである。また「無資産階級解放の道(二)」は第二号発禁の理由とされてきた。
- (17) 黒田礼二「古代末期哲学とアナルキズム」(『デモクラシー』第四号) なお、黒田礼二は岡上守道のペンネームである。
- (18) 「新人の書架」(『デモクラシー』第五号) に『過激派』についてつぎの紹介が掲げられた。

『デモクラシー』の思想

『新時代叢書第一編……過激派(八年、民友社) 陰惨な北歐にはれやかな人道の烽火があげられた。官憲の故意に依つて蔽はれ誣ひられた』『過激派』の真相を日本に伝える最初の且最良の著書として推賞する。尚ほ、執筆著者麻山改介黒田礼二片島新の三氏は新人会の同人である。』

(19) 「惨死せるリーブクネヒト」として全身写真が大正八年一月十九日付『東京朝日新聞』に、「殺害の報あるドイツの婦人煽動家ローザルクセンブルグ」として顔写真が二十日付『同』に掲載された。

(20) 山辺健太郎『社会主義運動半生記』(岩波書店、昭和五十一年八月) 六十二頁。

(21) 「海外時評」(『デモクラシー』第二号)

(22) 高岡幹夫『プレスカウスカヤ女史』(『デモクラシー』第四号) なお、高岡幹夫は佐野学のペンネームである。

(23) 「自由と強制」(『デモクラシー』第八号)

西欧文明への懷疑

H・D・スミス氏は新人会へ流入した思想の源を西洋にもとめ、近代日本の思想的傾向であるドイツ志向を反映して、新会はまずドイツ流のマルキシズムに接近し、それを受容したが、さらにイギリス流の社会民主主義、アナルコ・サンジカリズム、ソビエト・コミュニズムという三個の西洋思想により機関誌面をにぎわしたという。スミス氏の指摘するように、『デモクラシー』をはじめとする新人会機関誌は、『同胞』をのぞいて西洋思想を紹介することきわめて頻繁であり、新人会機関誌は外見的にはあたかも西洋社会思想の陳列場の観を呈した。しかし、仔細に新会会員の発言を検討してみると、西洋思想は新奇であるからとか、あるいはまたそれは日本の当面している問題に万能であるからという理由だけをもつて紹介されているのではなかつた。新会会員が憂慮したことは、わが国が欧米に比較して遅滞していることであつたり、古来からのわが国には多くの欠陥があるということと同時に、明治維新以来、数多輸入された西洋文明により日本と日本人は汚染され、荒廃した、ということでもあつた。日本と日本人が汚染されたことを憂慮した最適の例を一個だけ挙げれば、わが国においてはますます拡大する「貧富の懸隔」は、じつに西洋文明のチャンピオンである「資本主義」がわが国に導入され、急速に発

展したことから生じたと考えられた。新人会機関誌に執拗に紹介された様々な西洋社会思想は、西欧文明に征服され破壊された日本と日本人を救済するものとして有益であると思われたからである。毒を以つて毒を制す、ということである。

麻生久は「如何に生くる乎」⁽²⁾と題したエッセイにおいて、「維新以後の日本は西欧文明の輸入に依つて全く征服せられた。其日本主義を唱うる者と雖も精神は全く西欧の物質的國家主義者に他ならない。兄我等若き青年は今や西欧文明の根本的欠陥を知悉し、我等の祖先の中に生み出されたる高くして深き精神に食い入り、其中に新らしき人類の生活を見出さんとしつつある」と述べた。これは、西欧文明は物質的であるがゆえに根本的欠陥を有すということであり、この欠陥文明に征服された日本を正常なものに回復するためには、物質主義と反対の極にある日本人の「祖先の中に生み出されたる高くして深き精神」に回帰しなくてはならないというのである。「深き精神」は「新らしき人類」の規範にもなるものであると麻生は考へていた。この場合、「深き精神」の内容如何ということは問題ではない。重要なことは、日本は西欧の欠陥文明に征服されたとする考え方そのものである。ここで、欠陥文明のチャンピオンは資本主義であることになり、これが日本を征服し類廃させたのであるから、なにをおいても資本主義を打倒しなくてはならない、という結論になるのである。資本主義を否定する社会主義は、征服された日本を正常なものに回復させることになるであろうから麻生には魅力があるのである。麻生がロシア革命を前記のエッセイにおいて讚美するのも、革命は物質主義に汚染されたロシアから害毒を取り除いたからという観点からであつた。麻生は西欧文明を物質主義文明ととらえ、東洋文明を物質主義文明とは対極に在る精神的なものであると理解していたから、ロシア革命は東洋精神の勝利であるとまで断定した。麻生の主張における論理の飛躍、事実の誤認を指摘することは容易である。見落してならないことは、西欧文明、すなわち資本主義は物質的であり、根本的欠陥を有するから、これは許し難いと認識し、そこから資本主義を全面的に否定したロシア革命を歓迎している点である。

麻生が、西欧文明を物質的であり、それは根本的欠陥を持つと批判する時、物質的、根本的欠陥を持つとはいかなる内容

を指していたかという点については、さきのエッセイでは曖昧である。これらの点を鮮明に表現しているものは麻生の小説「農村の生活」である。麻生は、ここにおいて、西洋文明が日本的な情緒や幸福感、安堵感を破壊していることを悲痛な思いで描いている。例えばつぎのようにである。すなわち日本の風土と密着した農民の幸福感は「旧暦の破壊」により農民の生活から無残にも奪われた。なぜならば、昔の農民の生活は苦しく、田舎の生活は殺風景であつた。しかし、昔の農村には季節がくれば花が香り、祭りの太鼓がきこえてきた。そこには農民が心待ちにしていた人間としての幸福感があつた。農民が幸福であつたのは昔のことである、「悲しい事には新しい太陽暦が施行せられてから此自然と密着した田舎の生活はもうすつかりぶち壊されて仕舞つた」のである。西洋の太陽暦が日本の風土を無視して近代化の一環として採用されたがために日本人の幸福感はぶち壊された。改善ではなく、つぎのように改悪された。「新の正月には梅も咲かない。新の三月には桃も咲かない。菖蒲の節句には菖蒲も咲かない。新の十五日には月が出ない。おまけに内務省の馬鹿げた官吏が触れ出した風俗取締りの命令や、勤儉貯蓄の奨励は百姓の僅かの楽しみを根底から奪いとつて仕舞つた。祭の芝居は禁ぜられる。盆の踊りはさしとめられる。村の生活は全く砂漠のようになって仕舞つた」のである。喜びを失なつた「百姓は地主と役人の奴隷の様に田を耕し山に稼ぐ。けれ共其勞苦を忘れる楽しみは何一つ与えられない。県庁の役人は農事試験所で目論んだ四角張つた実験を百姓に強いる。近頃は田植歌の声もきかれなくなつて百姓は機械の様に田の中で働いている。規則に違えば直ちに何の容赦もなく罰金が科せられる」のである。農村の西欧化は、農民を奴隷のようにしてしまつた、というのである。農民は奴隷の境遇を脱するために、「村の若者は次第に村を見棄て、都會に出て仕舞う。村に残る者は老人と子供ばかり」となり、「村の家は次第に減じて壊れかけた空家の周囲には雑草が我物顔に生い茂る」のである。西欧文明のために「馬もやせる牛もやせる百姓の顔は疲れ果てる」のであり、日本の人口の過半を占める農民の生活がこのような状態になつている。西欧流の近代化が、日本の社会を合理的に改造したとは到底いえないと麻生は「農村の生活」で主張するのである。麻生の小説

は、新人会の綱領である「現代日本の合理的改造」にとり必要なものが如何なるものであるかということを示唆している。合理的改造とは西欧文物の直輸入であつてはならないという考え方がそこにある。日本人は西欧の技術・制度を導入したことにより幸福になれるものではないという考え方があつた。日本人の幸福は日本の精神的・自然的風土を破壊されては成り立たない、したがつて日本の精神的・自然的風土が西欧文明から攻撃をうける時には断固それを擁護すべきであるという主張が麻生の思想の根底にあつた。いま、日本の人口の半数を占める農民が、西欧文明の代表である資本主義により攻撃を受けているのであり、このことは日本の都市における市民も同様である。共同体的社会に住む日本人の和は資本主義により破壊されようとしている。日本人の土台を脅やかす資本主義を否定するものが社会主義であるならばこれをとり、社会主義が日本人の幸福を擁護できなければこれを放棄することにもなる。麻生が後に至り、革命の戦略について西欧直輸入の革命路線が日本の現実の前に破綻した時、日本的なものに急速に回帰していく要素は、すでに『デモクラシー』における麻生の論稿の中にあらわれている。麻生のみならず、他の新人会員の少なからぬ者は長じるに従い、かれらが学生時代に掲げていた西欧的思想から日本的考え方へと変化していくが、それは変心でも転向でもなく、かれらにおいては日本の精神風土を擁護するという点において一貫していた。新人会員は、社会主義が日本の精神・自然的風土を回復する手段になりそうであると考えられた時はそれをとり、ボルシェビズムこそ有効であると考えた時にはそれを奉じた。社会主義もボルシェビズムも資本主義と同根であるということがわかつた時には、日本的なものを守るためには日本的な改造の仕方があるのではないかという立場をとるのであつた。かれらが追求したものは、社会主義社会の実現というものではなく、攻撃を受けている日本的なるものの擁護であつたから、目的のために役に立たない「社会主義」、「ボルシェヴィズム」、「西洋思想」はいつでも放棄することができた。

(一) H. D. Smith, op. cit., pp. 73-7.

(2) 「宣伝 如何に生くる乎」(『デモクラシイ』第四号)

(3) 「小説 農村の生活」右同

結 語

本稿は『デモクラシイ』の思想は多様であり混沌としていたという従来からある指摘から出発しながら、多様であり混沌としていただけでは新人会という組織は結成されることもなければ維持されることもあるまい、多様混沌の中にすべての會員に共通した意識が存在していたのではないかという点からスタートした。

『デモクラシイ』において多様な思想が一拳に噴出した形となるのは、第一に大逆事件以後の思想的窒息状態が大正デモクラシーにより解禁された当時のわが国思想界の反映でもあつた。解禁された歓喜の方が先に立ち、各々の思想の相違につき検討することはなかつた。手に入る思想はすべて陳列したところに当時の青年知識人の思想的喝望を見ることができ、『デモクラシイ』の思想が多様であつたことの理由の第二点は、新人会員は当時思想界に流行していた新カント哲学の影響を受けていたことから自由主義的個人主義的態度を尊しとした。そこから必然的に唯一の思想をもつて絶対とすることなく、様々な思想を相互に許容することになるのであつた。

『デモクラシイ』において多様な思想が展開されたが、それはそれ以前におけるわが国の思想的窒息状態のリアクションであつたということと、新人会員は自由主義的個人主義的哲学に影響されていたということとも関連して、『デモクラシイ』に展開された様々な思想は、様々なものの中においても人間解放を目ざす思想という点において共通していた。『デモクラシイ』で紹介された思想はそこに紹介された限りでは、すくなくとも、人間解放に役だつものと考えられたもののみ掲載された。人間解放に逆行する思想は展開されていないから、この意味において新人会員は一個の思想的目標を持つていた。か

れらが思想的に統一されたものを保持していなかつたというのはミクロ的な視野からする説であり、大正中期から後期というわが国の社会・思想状況というマクロ的視野から見ると一定の方向において新人会員は思想を選択していたのである。

最後にわれわれは、新人会員が後年いわゆる「転向」する者が多かつたと批評される通説を念頭において、その点を説明する一個の手がかりを提出した。かれらは思想的に変節者であり、生涯を通じて一貫した思想に生きることできなかつた者である、という断定することは容易である。しかしながら変節論、思想的不忠実論を幾例挙げてみても、なぜかれらが変化し、時には一人の人間が一度ならず二度、三度と変化したのかという理由は解明されない。この場合、もつとも安易にとられる方法は、現世的利益を優先し、主義は手段であつたことである。「現実主義者」が利害打算に揺れたのだとすれば解明は簡単である。しかしわれわれは「転向」を変節、利害打算という観点からのみ分析する方法はとらない。われわれは、変わったように見えるものの中に変化しないものがあるのではないか、そうでなくては新人会員の多くの者は思想的のみならず人間的に全く信頼できない人びととなるのではないか、という素朴な疑問が、この研究をはじめた当初から存在した。われわれには社会運動、政治運動、学問、ジャーナリズム、法曹、文学その他、多方面において指導者と仰がれる人物になつていく新人会員が人間的に信頼されぬ人びとであつたとは考えられないのである。前節「西欧文明への懐疑」は、転向・変節の集団かのごとく考えられている新人会員の思想と行動を解明しようとする試論であり、これはわれわれの目ざす新人会研究の鍵となるものである。われわれは今後、前節で指摘した西欧文明に衝撃を受けた新人会のリアクションという分析方法を基本にして新人会の研究をすすめていくものである。(78・12・8記)

(後記)

本稿は中村・内川の共同論文であるが一九七八年七月からはじめた「新人会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメンバーは中村、内川の他に吉田博司(東京成徳短期大学講師)、酒井正文(中部女子短期大学講師)である。